# 君が好き

川本流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君が好き

【Ｎコード】
Ｎ０２９５Ｅ

【作者名】
川本流華

【あらすじ】
自殺未遂で病院へ運ばれた少年は、人と触れ合うことで生について想う。その中で、一人の少女と出逢う。愛を信じない少年と愛を拒む少女のラブストーリーが始まる。

# 出逢い

暗闇の中、風の音だけが虚しく耳を撫でた。服がハタハタと音を立てた。

『……なんで僕を産んだの？』

『もともと私は子供を生む気なんてなかったのよ。おろす金がなかったから仕方なく生んだだけ。それを十八まで育てたんだから、感謝して卒業したら働いて返しなさいよ』

台所で会話をした母親の姿が碧の頭に浮かんだ。

一度も振り向かなかった母親、その背中をただ黙って見つめていた記憶が思い返された。

碧はゆっくりと目を開けた。十二階建てのマンション屋上、向かいの高層ビルの窓に反射した夕陽に目を細めながら、碧はすぐ近くにある公園を見下ろした。

夏が近づき、外を出歩く人たちが多くなっていた。公園には複数の子供たちがボールを蹴って遊んでおり、その脇で母親たちが話をしていた。母親たちは時折自分の子供に目を配り、手を振った。その光景が碧の胸を苦しくさせた。

（幸せって、あんな感じなのかな？　……もう、どうでもいい）

碧は顔を真っ直ぐ向けた。夕陽で赤く染まった街並み、最後の光景だと思うと、美しく儚く思えた。

碧はフェンスから手を離すと、地面を蹴った。

零れる涙が空に舞った。

風の音が強くなった。

（痛っ）

途中で片方の鼓膜が破れたのを感じた。

突風が吹いた。

（えっ？）

風に煽られ、頭から落ちていた碧の身体は横を向いた。

一階には塀の変わりに花壇が並んでおり、コンクリートに落ちるはずの碧の身体は柔らかい土の上に落ちた。強風のせいで勢いも弱まっていたため、一瞬で意識を絶つほどの衝撃がなかった。
全身を強く打ちつけた碧は血を吐きながら悲鳴を上げた。
碧は痛みと死に切れない悔しさで止め処なく涙を流した。
救急車のサイレン、救護員の声が無駄に頭の中に響いていた。しかし、家にいるはずの母親の声は聞こえてこなかった。
碧は救急隊員の声を聞いているうちに意識が途絶えた。
次に意識を取り戻したとき、碧は柔らかいベッドの上にいた。
心電図の音、呼吸器から返ってくる温かい息、静かな空間の中で人を感じさせるものが一切なかった。
（……死ねなかった）
碧は力の入らない目蓋を持ち上げ、細い目で辺りを見回した。
目に入ったのは点滴の針が刺さった腕と白い壁、扉だけであった。
（誰も来ていない？）
椅子が一つも出ていない部屋を見て、碧は涙を溜めた。
「……まったく、何て母親だ」
「可哀想ですが、最近の母子なんてこんなものですよ」
「お二方、病院なのでお静かに願えますか？　意識がないとはいえ、患者の負担になる言動は禁止ですからね」
慌しく向かってくる足音に驚き、碧は咄嗟に眠っている振りをした。
（見舞い？）
碧は心のどこかで期待を持った。
トントン、扉を叩く音がした。
「碧くん、失礼するよ」
碧はあくまで眠っている振りをした。
扉が開くと、複数の足音が碧に寄ってきた。しかし、碧は寝たふりを続けた。
看護婦が碧の脈を確かめ、心電図の確認をした。
「どうです？」

「ええ、安定しています。いつ目を覚ましてもおかしくない状態です」
「……そうですか」
椅子を引きずる音がした。
「一週間も寝たきり。　……可哀想にな」
「まぁ、自殺を図るくらいですから、目を覚ましたくないのでしょう。　……目を覚ましても帰る家がなくなりましたしね」
「井本」
太い声が部屋中に響いた。
井本は恐縮して肩をすくめた。
部屋は静けさを取り戻した。
碧は自分の頬に涙が伝うのを感じた。泣くつもりは微塵もなかったが、自然とこぼれ落ちた。
「碧くん？」
看護婦の声を聞き、碧はゆっくりと目を開いた。
「いつから？」
「……皆が入ってくる、少し前から」
中年の男性が井本と呼ばれる少し若いもう一人の男性を睨みつけたが、井本は面倒くさそうに頭を掻くだけであった。
「こちらはね。警察の方よ」
看護婦が紹介すると、中年の男性は腰を上げ、手帳を開いた。
「中村警察署の菅です」
菅は坊主頭であごひげを生やしていた。目は細いが温かく、良い人だというのが一目でわかった。
「そして、こちらが部下の井本です」
菅が顔を向けると井本はため息交じりで頭を下げた。井本の容姿は細身で眼鏡をかけていた。一見はビジネスマン風、少し冷たい雰囲気を持っていた。
「さっきの話」
涙も拭わずに碧は小声でつぶやいた。

「ん？」
「帰る家がないってどういうこと？」
呼吸器越しで聞き取りづらかったが、その場にいる全員が意味を理解できた。
「大丈夫。気にしなくていい。それより君は身体を良くすることを考えて」
菅が言うと、看護婦も大きくうなずいた。
碧は井本の顔を見つめた。井本の碧を見る目は生き物を見るものではなかった。物を見るような、冷たい目だった。
「家がないって……」
繰り返し尋ねる碧に対して、口を開いたのは井本だった。
「君はね、碧くん。里子に出されたんだ。それでね、お母さん失踪中です」
その言葉を聞き、碧の心の奥深くで糸が切れるような音がした。
軽い調子で答える井本の頬を菅の平手が飛んだ。
「いい加減にしろ。何だ、その言い方は」
菅は井本の胸ぐらを掴むと、部屋の外へと連れ出した。
碧の瞳から涙が出ることはなかった。怒りもなく、悲しみもなく、空虚感だけが満ちていた。
「大丈夫よ。今、警察がお母さんを捜してくれているから」
いくら慰めの言葉を聞いても、碧の心には届かなかった。
碧は自分が空気に溶け込むような感覚を持ちながら、眠りについた。

碧が意識を取り戻して一週間が経った。身体を起き上がらせることくらいはできるようになった。自殺未遂をした碧は一般病棟とは異なる、自殺ができないように設計されている病室に入院させられていた。
部屋にはベッド以外に折りたたんだ椅子が一つあるだけ。ナースセンターからは一番近く、碧は看護婦が慌しく働く音を聞きながら、

四六時中、十センチ程度しか開かない窓から外を見ていた。緑の多い病院で、病院の敷地には一面芝が広がっていた。
病室を訪れるのは菅と看護婦だけであった。一度だけ高校の担任が訪ねて来たが、プリントされた退学届けにサインを書かせると、何も言わずに去っていった。
未だ母親は見つからず、碧は孤独と不安の中で震えて過ごした。自殺をしようにも、痛みが思い返されて怖くてできなかった。
碧は毎日布団を握り締め、涙を溢した。

ある昼下がり、穏やかな日が窓から射しこんだ。

生きているのがつらいって
死のうだなんて　思わないで

碧は心をなくしたように呆然と過ごしていると、外から歌声が聴こえてきた。ふと、外に目を遣った。
黒い服に真っ白なカーディガンを羽織った車椅子の少女が鳥たちと一緒に歌っていた。
時折フワリ舞い上がるカーディガンはまるで羽根のように柔らかく宙を舞い、天使のような姿に碧はいつまでも見つめていた。

# 月夜

毎日のように風に乗って外から歌が聴こえてきた。歌のすべてを聴くことはできず、聴こえてくるのは所々のみだった。
彼女の紡ぐ言葉は哀しいものが多く、今の碧には心に染みるものがいくつもあった。
外出が許されない碧にとって、十センチ程度しか開かない窓の隙間から彼女を眺めるのが日課になっていた。
（彼女は歌手なのかな？　見た感じ同じくらいの歳だけれど）
碧は自然と彼女に会いたい想いを募らせた。
看護婦は朝昼晩の三回検診に来た。入院したての頃は碧が自殺未遂者ということもあり、三十分ないし一時間おきに担当のカウンセラーや看護婦が診に来ていた。しかし、最近は碧が落ち着いた様子であったため、回数が減っていた。
「カウンセラーの先生がね、もうそろそろ一般病棟に移ってもいいって言っていたわよ」
看護婦は自分のことのように嬉しそうに言った。その顔も碧には卑屈に感じた。人が笑うということは自分が笑われていると受けてしまうようになっていた。
「……そう」
碧はろくに返事をせずに横を向いた。
看護婦は深く息を吐くと、黙って血圧を測った。

生まれてきてすぐに　僕らは
泣くことを強要される
光満たされた　世界に
産み落とされた　はずなのに

いつものように窓の外から歌が聴こえた。碧はゆっくりと外を見た。
「ああ、美雨ちゃんね。確か碧くんと同じ歳よ」
看護婦は穏やかな顔をして外を眺めた。
「……美雨」
「そう。冬原美雨ちゃん」
看護婦が碧に目を戻すと、碧は真っ直ぐな涙を溢していた。
「ごめん、痛かった？」
看護婦は慌てて血圧計を外したが、碧はそうじゃない、と首を横に振った。
何故泣いているのか碧自身理解できなかった。ただ、歌を聴いたとたんに涙が溢れていた。
「ごめんなさい」
碧は素直に頭を下げた。
看護婦は碧の手を軽く握った。
碧はエッ、エッと声を殺して泣いた。
『もともと私は子供を生む気なんてなかったのよ』
不意に母親の声を思い出した。
碧は母親の喪失をいっそう深いところで感じた。それだけではなく、自分の周りのあらゆる人も失ったことを頭で理解した。
穏やかな風が緑の香りを運んだ。
握られた手の温もりを感じると、碧は少し優しい気持ちに包まれた。

数日後、車椅子での移動ができるようになると、碧は一般病棟に移った。まだ、大人数と接するのは抵抗があるだろという病院側の配慮から、個室が与えられた。
個室は一階で日当たりも良く、窓が全開にできた。しかし、美雨が通ることはなかった。
碧の事件は精神不安定時の突発性自殺未遂として片付けられた。

事件が終わっても菅は見舞いを続けた。碧の母親の捜索状況を伝えるためという理由もあったが、碧のことを放っておけない様子だった。

いつものように仕事が終わると管は碧の見舞いに訪れた。

最初に母親が見つからないことを詫びると、世間話を碧に聞かせた。碧は返事をするわけでもなく、ただ黙って話を聞いていた。

陽が傾くころ、管は窓の外を見つめた。

空が赤く染まるのを、管は哀しい目をした。

「……実はね。私は幼いころ父親に捨てられたんだ」

寂しそうな横顔で、管はポツリつぶやいた。

管の言葉と同時に碧は目を丸くした。

「驚いたかい？」

「え、ええ」

管は優しく微笑んでいた。

「母は私を産んだときに亡くなった。体が弱い人だったらしくてね。それから父は一生懸命、私を育ててくれたんだがね。会社をクビになって、酒を飲む癖ができてしまった。良くある話さ」

菅は笑ってみせたが、その瞳の奥に哀しさが見えた。碧はいつの間にかその話を聞き入っていた。

「酒癖が悪い父でね。私が中学二年の時、あの日も夕焼けが綺麗だった。酒に酔った父は私を車に乗せて山奥に連れて行ったんだ。正直、ここで殺されると覚悟したよ。案の定、手には包丁を持っていた。　……でも、父は私を殺さなかった。酒が入るたびに『お前さえいなければ……』って言われていたのにね」

菅の瞳は潤んでいた。しわの入った目は深みを感じた。

「父はそのまま私を山に置いて去って行った。　……そして、帰り道で事故を起こして亡くなった。私は警察に保護されてね。施設で育ったんだ」

「なぜ、お父さんはあなたを殺さなかったのでしょう？」

「わからない。殺されずとも捨てられたのは確かだからね。それで

も父は私を愛していた。　……私はそう信じている」
話を聞いた碧にはピンとこなかった。しかし、数少ない自分の母親の笑った顔が思い浮かんだ。
碧はわずかながら心に温もりを感じた。
「僕の母も少しは愛してくれていたのかな？」
「もちろんさ。子供を育てるというのはとても大変なんだ。君のお母さんはそれを女手一つでやってきた。愛がなければできないことだよ」
強い口調で言う菅の言葉に碧は励まされた。入院以来、母親のことを思うと憎しみや悲しみしか感じなかったが、初めて優しい気持ちになった。
外から聞こえる鳥の鳴き声が新鮮に思えた。碧は大きく深呼吸をすると、久ぶりに心の底から身体の隅々まで生きていることを実感した。
生きていることが幸せかどうかはわからない。不幸なことがなくなったわけでもなく、これから大変な思いをする現実も変わってはいなかったが、いま少し生きてみようと小さく決意した。
碧の目に僅かながら活力が戻った。
「仕事に行かないといけない。また来るよ」
菅はニコリ笑うと碧の頭を軽く撫でた。碧は穏やかな顔をしてうなずいた。

昼は看護婦に車椅子を押されて庭を散歩し、夕方には毎日のように訪ねてくる菅と話をした。碧は狭いながらも以前より人との交流ができるようになった。
碧は散歩の途中、美雨をよく見かけた。看護婦の話では晴れの日は日が暮れるまでのほとんどを外のベンチで過ごし、雨の日も一回は外に出るようだ。
「彼女はいつ入院してきたの？」
「そうね……　先輩看護婦の話だと、十年くらい前らしいわ」

「そんなに前から？　でも、外に出ていられるなら大した病気でもなさそうですね」
碧は優しい目で美雨のほうを見た。車椅子に乗っていた碧は後ろの看護婦が悲しい顔をしていることを知る由もなかった。
次の日も、碧は美雨の姿を見かけた。
美雨はいつも穏やかな表情で木や止まっている鳥に向けて歌っているようだった。
（この前聴いた歌かな？）
碧は少し近づき、歌を聴きたいと思った。しかし、同級生に浴びせられた言葉が脳裏をよぎった。
『……冗談に決まっているでしょう。気持ち悪い。近づかないでくれる？』
『あんたなんかを好きになる人がいるわけがないでしょう。陰気で根暗な男』
碧は連鎖するように飛び降りたときのことを思い出し、吐き気を催した。手を震わせると、額にびっしょりと汗をかいた。同年代の女性を反射的に恐れていることを痛感した。
看護婦は慌ててタオルを取り出し、碧の汗を拭った。
「大丈夫？　戻りましょうか」
碧は病室に戻されると、診断を受け、そのまま夕方まで眠った。
目を覚ますと、花瓶の花の向きが変わっていた。
（菅さん？）
碧は寂しげな表情を浮かべると、身体を起き上がらせ、窓から夕陽を眺めた。
碧は赤く染まる木々を見て、飛び降りたときに見た公園の風景を思い返した。
（あんなことするんじゃなかった）
一人になると弱気な自分が顔を出した。
碧は枕に顔をうずめた。
陽が落ちると、病院は静けさに包まれた。

（眠れない）
その先、消灯時間を過ぎても碧は寝付けずにいた。
風が窓をノックした。
「風も面会に来てくれたの？」
碧はゆっくり起き上がると、窓を開いた。
窓から心地よい風とともに声が聞こえてきた。
（あの歌だ）
碧は窓から身を乗り出した。
美雨は月を見上げると、憂いの顔を浮かべていた。
（あんな顔もするんだ）
美雨は自殺をしようとした自分と同じ目をしているように感じた。
しかし、同時に管が見せたような、もっと深い孤独を知っている印象も受けた。
風が美雨の歌を運んできた。

生まれてきてすぐに　僕らは
泣くことを強要される
光満たされた　世界に
産み落とされた　はずなのに
悲しみが望まれる世界ならば
僕は何のために生まれてきたのだろう
死への旅路を歩んでゆく　僕らは
何を残すことができるだろう
すべてが無に帰す運命ならば

生まれてきたくなかった

死があるから生が輝くなんて
死を美化する　綺麗事
僕は死ぬことなく輝きたい

ねぇ、神様
死を与えた理由を教えてちょうだい
大切な人より先に　死ななければならない
その理由を
大切な人が　僕を置いて逝く
その理由を
ねぇ、神様
人生ゲームは　楽しめたかしら

歌い終わり、月明かりに照らされた美雨の姿はおどけた笑顔に哀しい目であった。
心配して美雨を探しに来ていた看護婦は哀しい顔をしていた。
「さぁ、帰りましょう」
看護婦は美雨の肩を抱くと、病院の中へと戻っていった。
うつむく美雨の横顔は菅が父親の話をしたときに見せた表情によ

く似ていた。
（僕よりも深い哀しみを持っている人は一杯いるんだね）
碧は途端に自分が小さく感じた。

## 背中合わせ

碧が入院して、一月が経った。リハビリも順調に進み、松葉杖を使ったら一人でも歩けるほどまで回復した。

一人で外に出てはいけないと念を押されていたが、碧は時折一人で外を出歩いた。そして、美雨がよく座っていたベンチの反対側に座った。

（あの子の歌が聴きたい）

しかし、美雨は一度も姿を見せなかった。

「碧くん、一人で出たらダメって言っているじゃない。転んで怪我をしたら、退院が長引くわよ」

看護婦の一人が慌てて駆けてきた。碧は決まりが悪い顔をすると、一息ついて松葉杖を手に取った。

病室に戻ると、菅が椅子に座ってリンゴを剥いていた。

「いないと思ったら、また美雨ちゃんを探しに行っていたのか」

「あら、そうなの？」

菅の言葉に看護婦は目を大きくした。

（おしゃべり親父）

碧は顔をしかめると菅を睨んだ。

碧は菅を慕い、色々なことを話した。通っていた学校のことから飛び降りる前のこと、入院生活のこと、そして、美雨の歌のことなど、学校で起こったことを親に話す子供のように話をした。

菅は碧の話を真剣に聞いた。おもしろい話には声を出して笑い、悲しい話は深刻な顔で聞いた。二人の間には深い信頼関係ができていた。

「でも、それならしばらくは外出しても意味ないわ」

「えっ？」

碧は看護婦のほうへ顔を向けた。

「美雨ちゃん、調子を悪くしていてね」

「大丈夫なの？」
「ええ。たまにね。調子を悪くするから」
看護婦は碧をベッドに座らせると、優しく微笑んだ。
「いや、別に……　僕はただ、……」
はにかむ様に言う碧を見て、菅と看護婦は目を合わせて笑った。
　看護婦が出て行くと、碧は菅の剥いたリンゴを食べた。
「病室まで会いにいけばいいのに」
「そんなんじゃないって」
管はからかうように話した。
　時折、会話に隙間が開くと、管は終始碧の様子を窺っていた。
「なに？　言いたいことがあるなら言いなよ」
「いや」
菅は首を横に振って目を逸らした。
　碧は菅の顔をジッと見た。すると、菅は深く息をついた。
「……お母さんが見つかったよ」
碧はリンゴを食べる手を止めた。
「君が生きていることを伝えた。本当は無理にでも連れて来たかったのだけれどね。お母さんが気持ちの整理をしたいというものだから、今回は……」
「そう。　……母は元気だった？」
「ああ。いずれは連れてくるよ」
菅の言葉に、碧は素直にうなずいた。
　碧はリンゴを一切れ菅に手渡した。静かな病室にリンゴを食べる音が響いた。

　碧は一人の時間は病室で過ごした。母親が訪ねてくることを心のどこかで期待していた。
　しかし、碧の母親が病室に訪ねてくることはなかった。
　数日経って訪ねてきた菅の表情はあからさまに曇っていた。
「母が、どうかしたの？」

碧が尋ねると、菅は頭を掻きながら椅子に座った。
菅は一つ咳払いをした。
「君のお母さん……」
「うん」
碧はただ事ではない様子に身構えた。
「私が訪ねたときに荷物をまとめて家を出ようとしていた。説得しようとしたら包丁を自分の首に押し付けられた。　……私はそのまま彼女を行かせてしまった」
碧は情景を頭に描いた。
碧の心はジワリと沈んでいった。
（そうまでして会いたくないのかな……）
管は眉間にしわを寄せた。
何かを言いかけては、首を傾け、深くため息をついた。
「何？」
碧が尋ねると、管は碧の目を見た。
碧は管が話しやすいように穏やかな表情を作った。しかし、その目は哀しみに満ちていた。
「もう、話してよ。　……後から辛いこと聞かせられるの、嫌だよ」
次第に瞳を潤ませる姿を見て、管は奥歯を噛んだ。
「君のお母さんは覚せい剤を所持していたことがわかった。今、警察は君のお母さんを捕まえるために動いている」
碧の心は悲しみで溢れた。目の前が闇に染まった。
「僕のせいだよね」
「いや、そんなことはない」
管は強い口調で言ったが、碧の耳にはろくに届いていなかった。
「もう、いいよ」
今にも消え去りそうな弱々しい言葉に、管は黙ってうなずいた。
病室に空虚感が漂った。物音一つしないその空間で、二人はいたずらに時を過ごした。
「そ、そういえば……」

重い空気を裂くように碧が話しかけた。
管の気持ちを察した碧はできる限り明るく振舞った。ここ数日菅は訪ねて来ていなかったため、話すネタは一杯あった。それを一つ一つ丁寧に話した。
面会時間が終わるまで二人は話続けた。途中で看護婦を交えて話をした。しかし、いくら話しても碧の心は埋まらなかった。
「これ、君のお母さんが借りていたアパートのテーブルに置いてあった」
帰り際、菅は碧の母親が碧に宛てた手紙を渡した。手紙は封筒に入れられ、碧へ、と表に書かれていた。
「悪いとは思ったが、読ませてもらったよ。　……君のお母さんは、やはり君のことを愛していたと思うよ」
管は肩越しに言うと、病室を後にした。
碧はしばらく封を開けずに母が書いた自分の名前を見つめていた。管の言葉を信じないわけではないが、別れの言葉以外が浮かばず、開けることが躊躇われた。
消灯時間が来てもそのまま開けられずにいた。碧は花の添えられた台の上に手紙を置くと、ベッドの中に潜り込んだ。
一時間、二時間経っても、手紙が気になって眠ることができなかった。碧は手紙を手に取ると、窓から部屋を抜け出した。
いつものように美雨が座るベンチの反対側に腰掛けた。そして、月明かりの下で封をあげた。

ごめんなさい。
もう、あなたを育てることはできません。
何もできなくってごめんなさい。
弱いお母さんでごめんなさい。

生きていて良かった。

便せんの中央に震える文字で書かれていた。
母親と一緒に自転車の練習をした昼下がり、公園で鉄棒の練習をしているときに迎えに来てくれた夕暮れ、数少ない母親との思い出が思い返された。
（……お母さん、温かい思い出があるよ。謝らないといけないのは、僕のほうだ　）
自然と涙が溢れ出した。碧は袖で涙を拭った。
突然の風に手紙が宙を舞った。碧は慌てて手紙が落ちたほうに顔を向けると、髪を耳にかけながら、少女が手紙を拾っていた。
「すみません」
涙を拭ってよく見ると、少女が美雨であることに気がついた。
美雨は優しく微笑んだ。
「泣いているの？」
碧は顔を背けた。
美雨は碧の座っているベンチに手紙を置くと、いつも座る、碧とは背中合わせのベンチに腰掛けた。
「夜になると悲しい気持ちになるの。　……きっと眠るのが怖いのね」
美雨は月を見上げた。
「……神様なんていないんだ。この世界には哀しみが尽きないから」
一呼吸置くと、美雨は大きく息を吸い込んだ。

舞い散る落ち葉を一枚掴んで
僕もきれいに朽ち果てたいといった君は
自ら　息を引き取った

今にも目を覚ましそうな　美しい顔
君は幸せそうに笑っていたね

残された私はどんな顔をすれば良い？
生きているのが　つらいって
死のうだなんて思わないで
明日は良いことがあるかもしれない
二人でいれば
幸せは無限大だった
生きている意味が　わからないって
答えを焦って探さないで
意味なんてないさ　Ｌｉｆｅ
君が生きている
ただ私は　それが嬉しい
それだけではだめだったのかな

美雨はさらに歌を続けた。
碧は涙を溢しながら、美雨の歌に耳を傾けた。
素直に母親が生きて、過ごしていることを喜べた。母親もそのように思ってくれていると思ったら気持ちが安らいだ。一方で自殺しようとしたことを深く嘆いた。
背中合わせで腰掛ける二人を月が照らした。
「涙でぼやけた視界。見る星空は輝きを増すから好き」

歌っているのか話しているのかわからないリズムで美雨はつぶやいた。
二人は空を見上げていた。
「美雨ちゃん、それに碧くんまで何をしているの？　部屋に戻りなさい」
声を上げながら看護婦が歩いてきた。
美雨は、はーい、と不満気に返事をすると、軽やかに立ち上がった。碧は手紙を封筒に入れると、まず涙を拭った。そして、手紙を懐に入れると、松葉杖を手に取った。
「さぁ、戻りましょう」
看護婦の手に掴まり立ち上がると、すでに美雨の姿はなかった。
碧は夢心地のように呆けた様子で病室へ戻っていった。
翌日、碧は看護婦に目一杯叱られた。次は松葉杖を没収するとまで言われ、碧はひたすら頭を下げた。
背中合わせで歌を聴いて以来、碧はベンチで美雨を見かけると覚束ない足取りで近づき、裏のベンチに座った。
美雨はいつも歌を歌うわけではなく、木々を眺めて深呼吸をしたり、鳥の鳴き声を聞くなり真似をして鳥と戯れたりしていた。そして、声を発すると、忽ち旋律を奏でた。

## 歩み寄り

碧の松葉杖がとれる頃、二人は挨拶と簡単な会話をする程度には知り合った。

「よく会いますね」

「う、うん。　……君はここが好きなの？」

「うん。ここは一番風が心地よくて、鳥が多く集まるから」

二人は相変わらず背中合わせで座っていた。

「鳥、好きなんだ」

「鳥の声、風の音、草木のこすれあう音、すべてが心に優しく響くから好き」

美雨は深呼吸をした。

碧は背中でその言葉を聞くと、同じように呼吸した。

「君は歌うように話すんだね」

碧の言葉に美雨はクスリと笑った。

碧が振り返ると、口に手を当てて笑う美雨の姿があった。木陰の隙間から差し込む日差しが美雨を照らした。その美しい表情に碧は思わず見とれていた。

「ん？」

美雨が首を傾げると、碧は顔を赤くして立ち上がった。

「いや、なんでもない。　……そろそろ、病室に戻るよ」

「そう」

あっさりと言う美雨の言葉に碧は少し寂しさを覚えた。

碧は後ろに目を遣った。美雨が鳥の鳴き声を真似ると、スズメが一羽、美雨の指に止まった。鼻歌交じりでリズムを刻む美雨の姿が可憐で、碧は写真を撮るかのようにその姿を脳裏に焼け付けた。

その瞬間、不要なスライドが間に入るのを感じた。

『あんたなんかを好きになる人がいるわけがないでしょう。陰気で根暗な男』

「わかっているよ」
二人が顔を合わす日はいつも美雨が先にいて、碧が背中合わせに座った。そして、数分沈黙が続いてから、決まって美雨のほうが声を掛けてくれた。
（もう、行くのを止めようかな）
碧はとぼとぼと病室へ戻っていった。
管は最近忙しい様子であまり訪ねて来なかった。
碧は窓から外を眺めると、他の患者の話し声がした。
（人の声が聞こえるだけで、こんなに落ち着くんだ）
碧は優しい気持ちになっていった。
自然が奏でる音、人の生活する音、改めて聞くと心が和らぐものもいくつもあることを実感した。
碧は目をつぶり、音を探すと、そのまま眠りについた。
翌日も気がついたらベンチに座っていた。碧は自分の意思の弱さに呆れた。
（今日は自分のほうから話さないと……）
話題をあれこれ考えているうちに時間だけが過ぎていった。
満を持して碧が振り返った瞬間、背中のほうから声がした。
「碧くん」
碧が振り返ると、菅が手を振っていた。
碧は苦い顔をしたが、すぐさま表情を緩ませた。
碧の高鳴っていた鼓動は次第に静まっていった。碧は手を振ると、菅のもとへと歩いていった。
「あの子が美雨ちゃんかい？」
菅は碧の肩越しにベンチに腰掛けている美雨の顔を覗いた。
「え、ええ」
碧の頬は自然と赤らんでいた。その表情を見て菅は笑みを浮かべた。
「さぁ、暑いから病室へ行こう」
碧は菅の背中を押し、病室へと歩いていった。その姿を見て美雨は憂いの表情を浮かべた。

菅は冷たいゼリーを差し入れた。
（あの子にも食べさせたいな）
碧はふとした瞬間に美雨を思い浮かべることが多くなっていた。
憧れを抱いているだけと何度も自分に言い聞かしたが、恋心を抱いていることに碧自身気づいていた。
その日は菅と一杯の話をした。
時折外を覗く碧の姿を見て、管は優しく笑った。

次の日もその次の日も碧はまるで条件づけされた犬のようにベンチに座っていた。
「この前の人、お父さん？」
碧が座ってしばらくすると、いつものように美雨が話しかけた。
「いや、違うよ。両親は……　もう、いないんだ」
「……そう。私と一緒ね」
美雨の口から初めて自身のことを聞いた。美雨の表情は微笑を浮かべていたが、その目は悲しみを感じさせた。
（この笑顔、管さんのする笑顔に似ている）
碧は管が両親の話をしたときのことを思い出した。
病院の真っ白い壁がオレンジ色に染まり始めると、碧はマンションの屋上から見た景色を思い出した。
碧の心は不安で溢れた。
「父親は僕が生まれる前にどこかへ行ってしまったらしい。母親も……　去っていってしまった」
悲しい気持ちに包まれていた碧は普段なら決して晒さない傷を晒した。これは美雨だからか、気分的なものかは、碧自身よくわからなかった。
「どうして？」
美雨が聞き返すと、碧は一つ頭を下げた。
「……僕は自殺しようとしたんだ。それが悲しかったのかな？　許せなかったのかな？　いなくなってしまった」

碧の言葉が発せられた瞬間、美雨の表情があからさまに曇った。
鳥の声が止んだ。
二人の間を重い沈黙が続いた。
「自殺をする人は嫌い」
沈黙を裂くように言い放つと、美雨は勢いよく立ち上がった。
美雨の頬を涙が伝った。碧は言葉を失い、早足で去ってゆく美雨に一言もかけることができなかった。

二日が過ぎても、美雨がいつものベンチに現れることはなかった。
碧は日ごろ話をする看護婦に美雨の様子を聞いた。話によると、美雨が気に入っているベンチはもう一つあり、最近はそちらへ行っているとのことであった。
「ケンカでもした？」
「ケンカというか……」
碧は病室で美雨との間で起こったことを看護婦に話した。
看護婦は忽ち困った顔をした。
「おそらく、気に障ること言ったんだよね。確かに自殺しようとするのはいけないことかもしれない。でも、それでも、理由があるわけで……」
碧は悲しみと困惑を浮かべた。
看護婦は碧の肩に優しく手を乗せた。
「美雨ちゃんのお父さんね。自殺をしているのよ」
自分が言うことではないと理解しながら、看護婦は話をした。
『いや、違うよ。両親はいないんだ』
『……そう。私と一緒ね』
美雨との会話が頭を巡った。
「お母さんも？」
「お母さんは美雨ちゃんを生んだときに亡くなったわ」
唯一の肉親を自殺という形で亡くした美雨の心境を考えた。

生きているのが　つらいって
死のうだなんて思わないで

（あの歌はきっとお父さんを思って作った歌なんだ）
母親の顔が過ぎった。生きていて良かったと書かれた手紙の重みを知った気がして、涙が溢れ出した。
碧は居ても立ってもいられなくなり、病院の外へ駆け出した。
うまく動かない足を引きずりながら走り回った。そして、ようやく木の陰がかかったベンチで、いつものように歌っている美雨の姿を見つけることができた。
碧は美雨の目の前へ飛び出した。涙でくしゃくしゃになった顔が突然現れ、美雨は思わず笑った。
「ごめんなさい。凄い勢いで出てくるから」
美雨は笑いながら一言詫びた。碧もつられるように少し笑った。
碧は涙を拭うと、一息ついた。美雨もまた、呼吸を整えた。
「看護婦さんから、お父さんのことを聞いた」
碧は目を伏せた。
美雨は優しい目で碧を見た。
「私の思いとあなたの過去は別の出来事ね」
「でも、それでも、悲しいことを思い出させてごめん」
碧の言葉を聞いて、美雨は哀しい顔をした。父親のことを思い出したからだけではなく、もう一つのことが胸を締め付けた。
美雨は碧の顔を上げようと、一歩近づいた。しかし、足がもつれ、碧にもたれかかるように倒れた。
「美雨ちゃん？」
慌てて碧が美雨の身体を仰向けにすると、美雨は鼻血を垂らしながら気を失っていた。
美雨の身体は人一倍冷たく感じた。
「美雨ちゃん？　……誰か。誰か」
金切り声を上げる碧を見て、他の患者を散歩させていた数人の看護

婦が駆けてきた。
すぐさま美雨は担架で運ばれた。
碧は目を丸くしたまま手を振るわせた。

## 恋心

美雨が目を覚ましたのは倒れてから二日後だった。看護婦は日射病と疲労と碧に話した。

（日射病？）

碧は疑い眼で看護婦を見た。しかし、美雨本人にも看護婦にも本当の理由を聞くことができなかった。

碧はベンチで美雨が早く元気になるのを待ち続けた。

相反して碧の容態はだいぶ良くなり、今後の身の振りを考えなければならない時期になっていた。

（働こう。それで、アパートでも借りて、暮らしていこう）

碧は深く息をすると、青々とした空を見上げた。

数日が経って、昼食後に美雨がベンチに顔を出した。碧は美雨に肩を貸すと、二人は一緒に座った。

「もう、いいの？」

「うん。　……ごめんね、心配かけて」

美雨は穏やかに笑った。あまりにやつれた横顔は碧の心を切なくした。

（どこか悪いの？）

碧は何度も聞きたかった質問を胸のうちで反芻した。しかし、決して言葉として出ることは無かった。

碧の様子を察した美雨はゆっくりと空を仰いだ。

「私、もう長く生きられないの」

美雨は軽い口調で言ってのけた。

碧は目を丸くした。冗談で言っている様子ではないが、現実味が感じられなかった。

美雨は穏やかな表情を浮かべていた。

「テロメア説って知っている？」

「いや……」

「人間ってね。細胞が分裂する回数が決まっているんだって。私は遺伝性の病気で人より異常なほど回数が少ないの。だから、大人に近づくほど死が近づいてくる」
美雨の瞳の奥は深い哀しみが満ちていた。
「……お母さんも同じ病気でね。年齢のこともあって、もう子供を作れない、産んだら死ぬってわかっているのに私を産んだの。お父さんはお母さんの死で心を壊して、私を置いて……」
声を震わせ、美雨は静かにうつむいた。
真夏日が続き、蝉の声が哀しげに響いていた。
ふと、美雨が横を見ると碧は大粒の涙を溢していた。
「僕はなんて馬鹿なことをしたんだろう」
碧はマンションから飛び降りた自分の行為を心から嘆いた。
「生きたくても生きられない人がいる。死ねば悲しむ人がいる。それなのに僕は……」
「優しさのこもった涙は好き」
歌うようにリズムを刻む美雨の言葉に温かさを感じ、碧はいっそう涙を流した。その様子を見て、美雨は、フフフと笑った。
美雨は包み込むように碧を抱きしめた。
木陰の隙間から差し込む日差しが、二人を照らした。
日が傾くまで二人は寄り添っていた。
碧の肩で寝息をたてる美雨が弱々しくて切なく感じた。
「好きだよ」
碧は今にも消えてしまいそうな美雨の横顔にささやいた。
愛されていると実感したことがなかった碧は人を愛することに臆病になっていた。しかし、膨れ上がり、張り裂けそうな美雨への想いを言葉に出さずにはいられなかった。
（……今度はきっと起きているときに言うよ）
碧の頬は夕陽色に染まっていった。
明くる日も碧はいつもの場所へ向かった。美雨は決まって空を見

上げていた。
風が吹くと長い髪が優しくなびいた。髪をかき上げる姿に碧は胸をときめかせた。
「どうしたの、そんなところに立ち尽くして」
「いや、別に」
碧は穏やかに微笑む美雨の顔に照れながら歩いていった。
二人は他愛のない話を繰り返した。
「私ね。薬の影響で人一倍体温が低いの。だから、黒い服を着させられるんだけど、可愛くないじゃない？」
「だから、白のカーディガン？」
「そう。真っ黒だと喪服みたいだしね」
会話の数だけ、二人の距離は縮まった気がした。
強い風が二人の間を吹き抜けると、わずかな空白が生まれた。
擦れあう葉音が悲しく響いた。
「なんで自殺なんてしようとしたの？」
静かな空間の中で口を開くのは、決まって美雨だった。
碧は闇の中へ沈んでいく気がした。
「傷ついたならごめん。答えなくていいから」
美雨は慌てて弁解した。
碧はそっと目を閉じた。
「つまらない理由だよ。好きだった同級生に騙されて、赤っ恥をかかされて、いじめの対象になって……　今思うと、本当につまらない……」
美雨は碧の横顔をずっと見つめていた。碧はその視線を感じながらも決して目を開けることはなかった。
「愛って何かわからなくて、愛されているって実感を受けたことがなくて、母親に愛って何か聞いたんだ」
「お母さん、何て？」
「面倒くさいこと聞かないでって」
碧の表情はみるみる強張っていった。

「じゃあ、なんで僕を産んだの？　そんな馬鹿なことを聞いてしまったんだ。母親との思い出を辿れば、十分愛情を感じられたのに……　その場の母親の言葉を鵜呑みにして……　僕は大切なものを投げ捨てた。疑う必要さえなかったのに……」
碧はグッと涙を堪えると、ゆっくりと目を開けた。そこには優しい笑顔の美雨がいた。
「お母さんがなんて言ったのかわからないけれど、きっと勢いで言っただけね」
美雨は優しく、しかし、力強く碧を抱きしめた。
碧は堪えきれずに涙を溢した。
「十分、温かいよ」
碧の言葉に美雨は切なさを溢れさせた。その感情を悟られないように下唇をかみ締めた。
風に揺れる木々が優しい葉音を鳴らした。
碧は顔を上げると、美雨の目を見つめた。
（後悔したくない）
碧は穏やかに微笑んだ。
「君が好き」
碧が言葉を発した瞬間、一斉に音が止んだ。
美雨は精一杯穏やかな表情をしたが、目が哀しみに満ちていた。
美雨の瞳に涙が溜っていった。美雨の表情から喜びの涙ではないことは明確であった。
「ありがとう。　……でも、ごめんなさい」
美雨はポツリ言うと、ゆっくり立ち上がった。そして、逃げるように駆け出した。
碧はその場で静かに顔を伏せた。

碧が告白をして一週間が経った。顔を合わせるのが気まずくて、碧はベンチへ行くことをやめていた。
碧は医師に呼ばれた。そして、その場で退院を告げられた。

碧の心は忽ち不安で一杯になった。
（まず、家を探さないと。それよりも仕事が先かな）
碧は長いため息をつくと、窓から差し込む夕陽を見ながら物思いにふけった。
トントン、病室のドアを叩く音がした。
「碧くん、入るよ」
菅の声に碧は顔を向けた。
「退院が決まったんだってね。おめでとう」
菅は満面に笑みを浮かべた。その顔は碧の顔を自然と笑顔にした。
「長い間ありがとうございました」
碧は姿勢を正して頭を下げた。
「菅さんがいてくれたから、つらい時期も乗り越えられた気がする」
碧の言葉を聞くと、菅は心を決めたような顔つきになった。
碧は首を傾げると、歩み寄る菅の姿をたどたどしく見つめた。
「なに？」
「碧くん、君、うちの子にならないか？」
菅の突然の申し出に碧は目を丸めた。
「私と妻の間には子供がいなくてね。君は良く思わないかもしれないが、君と接しているうちに情が移ったというか、自分の過去と重なる部分があって、なんというか……」
菅は不器用に言葉を並べると、頭を掻いた。
碧は目を落とすと、菅が話してくれた父親のことを思い出した。
不意に碧の脳裏に母親の姿が浮かんだ。唯一の肉親との縁が切れてしまうような気がして、返事は躊躇われた。
「ごめんなさい。里子に出されたとはいえ、僕の親はやっぱり母だけなんです。だから……」
碧は深く頭を下げた。
管は静かに息をつくと、残念そうに碧を見つめた。
「そうだね。お母さんも一人ぼっちになってしまうね。　……わかった」

碧が頭を上げると、管はそっと微笑んだ。
「しかし、家で暮らすことを考えてくれないかな。しばらくの間でも構わない。家も職もないのは大変だろう」
管がどれ程自分のことを思ってくれているか、碧の心にヒシヒシと伝わってきた。
碧はあまりにありがたい申し出に少し困惑した。しかし、行く当てのない碧は素直に菅の気持ちを受けることにした。
「ありがとうございます。住むところが決まるまでお世話になります」
「急ぐことはないよ。こちらはずっと一緒でも構わないのだから」
菅の明るい笑顔に碧も自然と笑顔になった。
菅は碧に歩み寄ると、その頭を優しく撫でた。
碧は人の温もりを感じた。
美雨に抱きしめられたときのことを思い出した。碧は切ない眼差しで床に目を落とした。
「さあ、家に帰って部屋の準備をしないとな。退院の日に迎えに来るよ」
「お願いします」
碧は深々と頭を下げた。
管が帰ると、碧はベッドで横になった。
碧は美雨との思い出を断ち切ろうと目を閉じ、首を何度も横に振った。しかし、目蓋の裏では美雨の姿ばかりが輝きを放って現れた。

退院の朝、早くに目を覚ました碧は、お世話になったものすべてに別れを告げに向かった。
病院内で挨拶を終えると、碧は外へと出かけた。そして、いつものベンチに座ると碧は木を見上げた。
「いつも涼しい日陰をありがとう」
碧は木に声を掛けると、さえずりを上げるスズメとしばらくの間話をした。

「……なんで告白なんてしたんだろう？　後悔しているわけではないんだ。ただ、人を好きになるなんて、懲りたはずなのに……」
碧は空を仰ぐと、擦れあう葉音に耳を傾けた。
「伝えずにはいられなかったんだ。だって、伝わらない想いは無いのと同じ。そうでしょ？」
碧の言葉に耳を傾けるかのように一切の音が止んだ。
「……ねぇ、彼女が来たら、もう一度伝えてくれないかな？　君が好きだって」
碧はゆっくりと立ち上がると、しっかりとした足取りで歩き始めた。
　碧の後方から足音がした。
「あなたが手紙を読んで泣いていたときも、自殺の話をしたときも、いつもいつも、　……ああ、素直な人なんだなって思ったの」
次第に近づいてくる聞きなれた声に碧は振り向くことができなかった。
「私もあなたが好きよ」
その言葉を聞いた瞬間、碧の瞳から涙が溢れた。
　美雨は碧の背中に額をつけた。
「私はあなたより早く死ぬわ。それも、もう遠くない。だからね。嬉しさよりも哀しみが溢れたの。あなたを好きになっても苦しくなるだけだって　……あなたのこと、大好きだけど……」
背中の温もりがいっそう愛しさを増した。
「だから、ごめんなさ……」
碧は言葉を塞ぐように正面から美雨を抱きしめた。
「ずっとそばにいるよ」
美雨は碧の胸の中で何度も首を横に振った。
「もう決めたんだ。ダメと言われても、嫌と言われても、そばにいる」
碧は優しい口調で話した。
「無理なんだよ。私、死ぬんだ。　……恋なんてしないって決めていたのに。大切な人ができたら死ぬのが怖くなるから……」

碧は美雨の口を押さえるようにきつく抱きしめた。
美雨は碧の胸の中でエッ、エッと泣いた。
「君が好き」
碧は耳元で優しく囁いた。表情は穏やかで迷いはなかった。
美雨は胸の中で止め処なく涙を流した。
「二人でいれば幸せは無限大だよ」
碧の言葉に美雨は笑った。
「バカ」
美雨は顔を上げると、涙を拭った。
スズメは祝福の歌を歌い、木々は葉を鳴らした。
二人は照れくさそうに笑うと、互いの目を見た。そして、優しい口付けを交わした。
「毎日会いに来るよ」
「時々で良いよ」
「いや、毎日来る」
あまりに一生懸命言う碧を見て、美雨はクスクス笑った。その顔を見て、碧は顔を赤らめながら、声を上げて笑った。
二人はベンチに座ると、寄り添いながら周りの音を聴いた。風の音、風が鳴らす葉音から人の声まで聴きなれた音が新鮮に感じた。
碧は菅の声を聞いた。
「迎えが来たみたい」
「うん」
美雨が優しくうなずくと、碧はゆっくりと立ち上がった。
「仕事を見つけて、自立できるよう頑張るよ。美雨をいつでも迎え入れられるように準備しておく。だから……」
「うん。私も早く良くなる」
二人は幸せをかみ締めるように微笑み合った。一緒に暮らすことなど叶わないと互いに思いながら、二人は約束を交わした。
碧は穏やかな顔で手を振る美雨に見送られて退院していった。

## 誕生日

碧が退院して三ヶ月が経った。
秋が深まり、冷たい風が冬の足取りを感じさせた。
碧は毎日朝から夕方まで工場で働き、面会時間ギリギリの二時間ほど会うために美雨のいる病院へ駆けつけた。そして、面会時間が終わると、今度は喫茶店で働いた。
碧は将来美雨と喫茶店でも営みながらノビノビ過ごす生活を夢見ていた。しかし、碧の想いを打ち砕くように美雨の病気は少しずつだが悪化していった。
美雨の身体は痩せ、少し小さくなった。
二人は会う度に些細な話でも大げさに笑いあった。しかし、その声はどこか二人を悲しくさせた。
美雨の誕生日が近づき、これを機に碧は不穏な空気をいっそうしたいと思っていた。
「来週の誕生日、何か欲しいものはない？」
碧は美雨の顔を覗き込んだ。しかし、美雨は微笑みながら首を横に振るだけであった。
「何にもいらないよ」
その言葉に碧はあからさまに不満を浮かべた。
「でも……」
「わかった。考えておく」
美雨は表情を雲らせる碧を見て、フフフと笑った。
「うん。よろしく」
碧は穏やかな顔に戻っていた。
喫茶店が休みの日、碧は面会時間を過ぎると、真っ直ぐ菅夫妻の待つ家へと帰っていった。
菅の家で同居している碧は実の息子のように可愛がられた。碧はその思いに応えようと、一つでも多くの孝行を心がけた。食事は一

緒にとり、後片付けを一緒にしたり、肩を叩いたり、自分の母親に出来なかった分も一杯行った。
何気ない会話をしながら、夜が更けていった。
穏やかに過ぎる時間に碧は幸せを感じていた。

休日は朝から夕方まで美雨と一緒のときを過ごした。
美雨は体に負担が掛からないよう車椅子に乗って生活するようになった。
「まだ歩けるよ」
「うん、わかってる」
碧は落葉が舞う病院の周りを歩いた。
美雨の顔色が優れないように感じた碧は車椅子を止めた。
「どうかした？」
「ううん。少し疲れているだけ」
美雨は優しく微笑むと、静かにうつむいた。
（気を遣わせているのかな）
ここのところ毎日訪ねてきていたので、碧は美雨の負担になっていないか心配になった。
美雨は碧の想いを察すると、少し悲しい目をした。
「もう戻ろう。少し休みたい」
「あっ、うん」
碧は慌ててうなずいた。
車椅子の中で美雨は眠っているようだった。碧は時折声を掛けたが、簡単な返事が返ってくるだけであった。
病室に戻ると、美雨はすぐに眠ってしまった。
ベッドに入る前に、ごめんなさい、と一言つぶやいた美雨の横顔が碧の胸を締め付けた。
（謝らないで）
好き合ってから二人の距離が遠退いたように感じた。
（いつまでも傍にいたいよ。ずっと、近くに……）

碧は美雨の手を額に当てると、祈るように目を閉じた。
トクン、トクン、美雨の脈が優しい音を立てた。
美雨の温もりを感じながら、碧は寄り添い、眠った。

『パパ、ママ、トーボがいる』
『ああ、赤トンボだね』
ススキがサラサラと音を立てる中、少女は手を伸ばし駆け出した。
碧はその少し後ろを歩いた。
秋の夕暮れは川をオレンジ色に輝かせた。
『華蓮、転ぶわよ』
優しい声が聞こえるほうへ碧は振り返った。そこには、黄金色に輝くススキに負けないほどの眩い笑顔の美雨が立っていた。
碧は少し立ち止まると、美雨が自分のもとに来るのを待った。そして、二人は手を繋いだ。
『華蓮もすぅ』
華蓮は二人の間に入った。
碧と美雨は目を合わせると、穏やかに微笑んだ。

碧は目を覚ますと、ゆっくり体を起こした。
体には毛布が掛けられていた。
美雨のほうへ目を遣ると、美雨の頬を涙が伝っていた。
「美雨？」
碧は不安げな面持ちで美雨の涙を拭った。
夢とは違い、自力で歩くこともままならなくなった美雨の姿を見て、碧は涙を浮かべた。
「……」
美雨はうわ言をつぶやいた。
碧は耳を傾けたが、うまく聞き取ることはできなかった。
（どんな夢をみているのかな？　同じ夢ならどんなに幸せだろう。
……そんな偶然ないよね）

おそらく美雨は自分の子供と手を取り合い、歩くことはない。夢でしか描けない幸せに、碧は涙を溢した。
これ以上美雨の顔を見ていると、切なさに全身が締め付けられる気がした。
「……もう、帰るね」
碧は震える声で眠っている美雨に囁いた。
「ウッ……」
碧が病室を出ようとすると、美雨がのどを詰まらせたような声を出した。
碧が慌てて顔を覗くと、美雨はうまく呼吸ができない様子だった。
「美雨？」
碧は急いでナースコールを押した。
「美雨」
看護婦が駆けつけるまで、碧は必死に名前を呼び、背中をさすり続けた。
美雨は集中治療室へと運ばれた。碧は面会謝絶の病室前で小一時間ほど祈るように手を合わせていた。
「神様、美雨を助けて。あなたからすれば簡単な願いでしょう」
何人の人がしただろうか、その願いに看護婦は悲しそうにうつむいた。
それから数時間経っても美雨は出てこなかった。
「碧くん、今日は帰りなさい。何かあったら連絡してあげるから」
看護婦はうつむき、祈る碧の肩を抱くと、優しく身体を起こした。
碧は促されるまま、病院を後にした。
その夜、看護婦から連絡が入ることはなかった。
美雨は危険な状態からは抜け出したが、集中治療室で過ごした。
碧は仕事を休み、毎日病院へ通った。
（美雨）
部屋に入ることが許されない碧は、部屋の外で祈りを捧げた。

美雨が意識を取り戻したのは、三日後。集中治療室を出たのは八日後であった。
二人で祝うはずの美雨の誕生日は無常にも過ぎていった。
美雨は病室から星を眺めていた。終始悲しい顔を浮かべていたが、何かを決めたように小さくうなずいた。
美雨が意識を戻した翌日から、碧は仕事に復帰した。
工場では解雇の処分が下りかけたが、管が頭を下げることで免れた。
「ごめんなさい」
碧は迷惑を掛けたすべての人に言って回った。
仕事を終えた碧は急いで美雨の病室へと向かった。しかし、病室に美雨の姿はなかった。
「美雨……」
碧は不安に駆られて、病院中を探し回った。
診察室からふと現れた美雨を碧は思わず手を握った。
「どうしたの？」
「また、具合悪いの？」
碧は今にも泣き出しそうな顔だった。
「いなくならないで」
「ふふっ、子供みたい」
美雨は優しく微笑むと、碧の頭を撫でた。
二人は美雨の病室へ戻った。
美雨は碧の顔をまじまじと見た。
「何？」
「……私ね。退院することにした。先生にも許可をいただいたわ」
突然の言葉に碧は目を丸くした。
「良くなったの？」
碧の問いに、美雨は静かに首を横へ振った。
「そう、だよね」
碧は分かりきった回答にうつむいた。

美雨は終始穏やかな顔であった。
「過ぎてしまったけれど、誕生日プレゼントが欲しい」
美雨の言葉に碧は顔をあげた。
「うん。いいよ」
「限られた時間、あなたと一緒に過ごしたい」
差し込む夕陽が美雨の潤んだ瞳を輝かせた。あまりに切ないその表情に碧は目をそらした。
「過ごせるよ。病気が良くなったら」
美雨は黙って首を一つ傾けた。
「今だって、入院していたって一緒の時間を過ごせているじゃないか」
美雨は首を横に振った。
「もっともっと、一秒でも長く、好きな場所で二人一緒に居たいの」
美雨は碧の目を真っ直ぐ見つめた。すると、碧は堪らずうつむいた。
夕陽が二人を穏やかに包んだ。二人は言葉を発することなく、その温かさを感じた。
音のない部屋で時間だけが過ぎていった。
碧は窓から傾く夕陽を見つめた。一秒でも長く生きていて欲しいという碧の想い、一秒でも長く傍にいたいという美雨の、二人の想い。二つを抱えて何が一番大切かを考えた。
（ずっと傍で笑っていて欲しい）
最後に碧の心を決めたのは、当たり前の想いだった。
「部屋を探すよ」
碧のまっすぐな目を見て、美雨は涙を流した。
「ありがとう」
美雨は張り詰めたものが切れたように、安堵の表情を浮かべていた。
（ごめん、無理をさせたね）
碧は美雨を強く抱きしめた。
夕陽は静かに沈んでいった。

美雨は自然が豊かな場所での暮らしを希望した。
碧は管に事情を説明すると、田舎にアパートを借りた。
引越しをする前日、碧は美雨から、もう長く生きられないことを告げられた。
「あとどのくらい？」
「一年程度って言われた」
「……そう」
美雨の目に迷いはなかった。その目を見て碧は心を強く持とうと決めた。
「一秒でも長く……」
「うん」
美雨はくしゃくしゃな笑顔で答えた。
二人は病院で少し多めの薬をもらった。
「いいのかい？」
主治医の言葉に美雨は深くうなずいた。
「そうか」
主治医は娘を見送るような気持ちで送り出した。
「長い間、ありがとうございました」
美雨が深々と頭を下げると、看護婦の何人かは思わず泣き出した。
空は青々とし、鳥が見送るように優しく鳴いた。
美雨は鼻歌で返事をすると、深く呼吸をした。
「じゃあ、行こうか」
「うん」
二人は穏やかに微笑み合うと、手をつないで歩いていった。

## 君に残せるもの

碧と美雨は畑をしながら暮らし始めた。春から夏にかけて、二人は作物を植えた。

月に一度、管が喫茶店に訪ねてきた。様子見がてら美雨の薬を持ってくるため、二人は管のことを天使と呼んでいた。

「やめてくれよ。柄にもない」

管は決まって照れくさそうに頭を掻いた。

穏やかな日々も束の間、半年も過ぎない間に、美雨は一人で立つことがままならなくなった。

美雨は車椅子の生活を余儀なくされた。

「迷惑をかけてごめんなさい」

ため息をつこうとする美雨に碧は口づけをした

「ため息は幸せを逃がすよ」

「バーカ」

優しく微笑む碧の顔を見て、美雨も微笑んだ。

碧は工場などの仕事で貯めたお金を崩し、小さな喫茶店を拓いた。キッチンの高さ、カウンターなどほとんどのものが美雨を基準に設計されていた。

地元の人の協力で畑と喫茶店を両立できた。

「はい、碧ちゃん。畑で取れた野菜よ」

「ありがとう」

碧は野菜を受け取ると、キッチンに運んだ。そして、入れ替わるように美雨がお茶を差し出した。

「ありがとう、美雨ちゃん」

「いえいえ。こちらこそ」

客といえば畑でお世話になっている人、無駄に長い雑談を繰り返す老人ばかりであった。それでも、隣で微笑む美雨の顔があるだけで碧はこの上ない幸せを感じていた。

夜になると、碧は美雨を風呂に入れた。そのとき美雨は決まって歌を聴かせた。美雨の歌は切ないものが多かった。
「その歌……」
「ん？」
「昔に作ったの？」
「うん」
美雨は死へ向かう自分に祈りを捧げるような歌を窓から見える月に向かって歌った。
「現在の想いを綴った歌を作ってよ」
唐突な碧の言葉に美雨は首を傾げた。そして、一つ笑った。
「じゃあ、お互いに捧げる歌を作ろう」
「えっ……」
碧は歌など作ったことはなく、困った顔をした。
「余計なことを言ったな」
美雨はフフフと笑った。
「勘弁してよ」
「だめ」
美雨があまりに優しく微笑むので、碧は渋々うなずいた。
「いつになるかわからないよ」
「うん。楽しみにしている」
二人の声は優しく響いていた。
風呂から上がると、二人は同じベッドで横になった。
美雨は眠ることを怖れた。
「大丈夫？」
「昔は目が覚めないんじゃないかって怖かった。今はこの幸せが泡のようになくなること、あなたを一人にしてしまうことが怖い」
幸せな日が重なるにつれ、美雨は恐怖に怯えるようになった。
（僕が想いを告げなければ、美雨はこんな想いをせずに済んだのかな？）
体を震わす美雨を見て、碧はやりきれない気持ちになった。

「大丈夫。僕が必ず起こしてあげる。いつまでも傍にいるよ」
碧は美雨の手を握り、二人は寄り添い眠った。

いつものように管が訪ねてきた。しかし、いつもと面持ちが違った。
「どうしたの？」
碧の顔が笑顔から強張っていった。
管は碧を喫茶店の外に連れ出した。美雨はその様子をカウンターの陰から見ていた。
管が口を開くと、碧はたちまち泣き崩れた。管はその場で膝をつくと強く碧の肩を抱き寄せた。
ただ事ではないことを感じた美雨は懸命に外へ出た。
「なに？」
瞳を潤ませる美雨を見て、管はゆっくりと立ち上がった。
「……」
管は口を開いたが、言葉にならなかった。
「碧のこと、よろしく頼むよ」
管はやっとの思いで言葉を発すると、美雨に持ってきた薬を手渡した。そして、早々に立ち去った。
去ってゆく管の肩は小さく震えていた。
美雨は碧の背中を擦った。碧は美雨の膝に泣きつくと、しばらく涙を流した。
店はすぐに閉めたが、美雨が事情を聞かされたのは夜であった。
「お母さんが自殺したんだ」
美雨は一瞬で凍りついた。
（そんな……）
美雨は首をつって自殺したときの父親の姿を思い出した。
美雨は碧を力強く抱きしめた。
「覚せい剤中毒だって。　……菅さんがね、きっと本人も死ぬ気はなくて……」

「もういいよ」
今にも泣き出しそうな美雨の声を聞いて、碧はいっそう涙を溢した。
「僕のせいだ」
「そんなことはないよ。　……そんなことない」
美雨は優しい声で言うと、いっそう強く抱きしめた。碧は弱々しいその腕をいつも以上に愛しく感じた。
二人は一晩中、寄り添っていた。互いに口を開くことがなく、鳴き始めの虫の音が静かに響き渡った。

管は暇さえあれば碧を訪ねてきた。
碧は明るく振舞ったが、何に対しても上の空な様子だった。
管と美雨は目を合わせると深く息をついた。
「やはり、言うべきではなかったかな」
「でも、いずれはわかることでしょう」
管と美雨は店の裏で話した。
「肝心なところで何もしてやれない。碧も母親も……　そして……」
管は空を仰いだ。
「そんなことないです。管さんがいなければ、今、この時はありません」
美雨も同じように空を見上げた。
秋を感じさせる肌寒い風が吹いた。
「さぁ、仕事に戻るよ」
管は美雨の肩に手を置いた。
「碧の傍に……」
「うん」
美雨は真っ直ぐな目でうなずいた。
管は安堵の表情を浮かべた。しかし、その瞳は悲しみに溢れていた。その理由は美雨もわかっていた。
管は背中を丸めて歩いていった。
「私の行いは残酷かな。二人の果ては見えているのに……」

強い風が吹き、草木が一斉にざわついた。
管は表情を強張らせた。
「神様、あんたのほうが余程残酷だ」
管は背筋を伸ばすと、しっかりとした足取りで歩いていった。
美雨は去っていく管の後ろを静かに見つめていた。
（私の残された時間で碧に何をしてやれるだろう？）
擦れあう葉音が聞こえた瞬間、美雨の脳裏にオレンジ色に輝く川、駆け回る女の子の風景が浮かんだ。
（あの時見た夢……）
美雨は自然と温かい気持ちになった。
美雨は店内に戻った。
お客相手に悲しい目をして笑う碧の姿に、美雨は目を伏せた。
（彼に残せるもの、それは……）
美雨の目蓋の裏に、黄金色に輝くススキが溢れた。
美雨の口元は緩んでいた。
「どうしたの？」
碧の声に美雨はクスッと笑った。
「ん？」
「ううん、なんでもない」
美雨は穏やかに微笑んだ。
閉店するとすぐに、碧は美雨を風呂に入れた。
美雨は少し明るめの歌を歌った。
「何かあった？」
碧は美雨の背中を流しながら尋ねた。
美雨は目を閉じると、一つ笑った。
「昔見た夢を思い出したの」
美雨はゆっくり目を開け、天井を見上げた。
「秋の夕暮れ、音を奏でるススキ、オレンジ色に輝く川、それでね……」
美雨の言葉を聞いた瞬間、碧には以前見た夢の風景が広がっていた。

「女の子が赤とんぼを追いかけるの」
碧の頬を涙が伝った。
（同じ夢を見ていたんだね）
背中を流す手が止まった。
美雨は碧のほうへ顔を向けた。
「君に残せるものを探したんだ。ずっと君の傍には居られないけれど、一生分の幸せを君にあげたい。一生繋がっていられる絆を結びたい。そうすれば、私も穏やかに眠られる」
美雨の声は柔らかく響いた。
碧の潤んだ瞳に映る美雨の姿は涙で輝いた。
「家族を作ろう」
その言葉に碧はいっそう泣いた。
「でも……」
「大丈夫よ」
美雨は倒れるように碧に抱きついた。その体は湯気立っているのに冷たかった。
碧は儚く、愛するものを強く抱きしめ返した。
二人は風呂を上がると、寄り添いあった。
「僕は君に何もしてあげられないね」
声の調子を落とす碧に、美雨は何度も首を横に振った。
「もう、十分の幸せをもらったよ。　……私、恋をしてよかった。人を愛せてよかった」
二人は手を繋ぎ合うと、頬を寄せた。
「名前は華蓮にしよう」
碧の言葉に美雨はフフフと笑った。
「男の子でも？」
美雨が言うと、碧はハッとした。
「きっと女の子だから……」
「そうね」
二人は布団を頭までかぶると声を上げて笑った。

三ヵ月後、美雨は懐妊した。
医者からは無事に生むことができる保障はできないと言われたが、美雨に後悔はなかった。
（この子は生んでみせる）
美雨は生涯で一番強く、穏やかな気持ちに包まれていた。そして、心は幸せに満ちていた。
碧と一緒に美雨が喫茶店に戻ると、店はお祝いの準備がされていた。
「碧、美雨ちゃん、おめでとう」
管の言葉をかわきりに、集まっていた人たちがお祝いの言葉を浴びせた。
二人は目を合わせると、照れくさそうに笑った。
テーブルは地元の人が持ち寄った料理とお酒で満たされた。
「ご両人飲もう」
「こらっ、美雨ちゃんに勧めるんじゃないわよ」
「さぁ、温かいうちに料理をお食べ」
人々の温かさがヒシヒシと伝わってきた。
「こんなに幸せな日が来るとは思わなかった」
涙ぐむ碧に美雨も思わず涙ぐんだ。
「まだまだ、これからだろう」
管は碧の頭を軽く撫でた。
お祝いは終始賑やかな雰囲気であった。
終盤に差し掛かると、碧は美雨を席の中央へ呼んだ。
「なに？」
美雨が尋ねると、碧は一度目を逸らした。赤くなった頬は酒のせいか恥らっているのか、わからなかった。
「もう、なに？」
美雨は再度笑いながら尋ねた。
「君が幸せを形にしてくれたから、僕も形のある幸せを渡したいと

思ったんだ」
碧はポケットから箱を取り出した。
「結婚しよう」
碧の笑顔は、はにかんでいた。
美雨は心から幸せが溢れ出すのを感じた。
「いいの？」
「いいの」
碧は深くうなずいた。
「はい」
美雨はくしゃくしゃな笑顔で答えた。
一瞬にして賑やかな雰囲気から穏やかな空気に変わった。
碧は指輪を取り出すと、美雨の左手薬指に付けた。
美雨は真っ直ぐ涙を流した。
「あらま。素敵」
「おい、写真を撮るぞ」
人々は碧と美雨を囲んで集まった。
碧は美雨の涙を拭うと、抱き上げた。
カシャっとシャッターの下りる音がすると、場は一斉に沸いた。
フィルムには皆が幸せそうに笑う姿が映っていた。

## 命

二人が籍を入れてから半年が経った。美雨のお腹は大きく膨らみ、出産を間近に控えていた。

美雨の病状は落ち着き、奇跡的に回復の兆候さえ見られると医者は驚きを浮かべた。

碧は家で買い物袋を開くと、赤ん坊用の服を広げた。

「華蓮、可愛らしい服だよ」

碧はソファーに腰掛ける美雨のお腹に話しかけた。

お腹の子は期待通り女の子だった。

二人は早々と名前を決めると、女の子用の物を買い揃えた。

「早く逢いたいな」

美雨は優しい顔をして、お腹を擦った。

美雨の体調は優れている様子で、出産に対する望みが溢れた。

(きっと、大丈夫)

碧は美雨の横に腰掛けると、手を握った。

柔らかい日差しが空間を包んだ。

二人は目を合わせると、満面に笑みを浮かべた。

「んっ……」

美雨の顔が歪んだ。

予定日は二ヶ月先だったため、碧は慌てて病気の薬を手に取った。

「ううん」

美雨は首を何度も横に振ると、お腹を押さえた。

碧はどうすればよいかわからず、目を泳がせた。

「病院……」

「う、うん」

碧は促されるままに車を廻すと、美雨を乗せた。

病院に着くと、美雨は直ちに分娩室へ運ばれた。

「美雨と子供をお願いします」

碧はすがる様に看護婦にお願いした。
碧は出産に立ち会うために服を着替えた。
「美雨」
碧は終始手を握り、声を掛けた。
美雨が分娩室に入って、十時間が経った。付き添っている医師は何度も美雨の体調を確かめ、最悪の事態に備えた。
美雨は言葉にならない声を何度も発していた。
「もう少し、もう少しだからね」
産婆の言葉を聞き、美雨は一生懸命力を入れた。
美雨は力強く碧の手を握った。碧は、大丈夫と何度も声を掛けながら、美雨の額の汗を拭いた。
心電図の音の間隔が短くなっていたことに、碧は気がつかなかった。
「んっ」
美雨が声を上げると、途端に力が抜けた。
「美雨？」
碧が声を掛けた瞬間、赤ん坊の泣き声が響き渡った。
碧は産婆の手の中にいる赤ん坊を見ると、涙を溢れさせた。
「美雨、生まれたよ」
碧は満面の笑みで美雨に目を移した。
さっきまで荒々しかった美雨の呼吸が止まった。
すべての音が止み、時が止まったように感じた。
心拍数が停止した音が響いていた。
「美雨？」
美雨の額から冷たい汗が零れ落ちた。
「美雨！」
碧の叫びと同時に、医師が蘇生治療を始めた。
碧は部屋の隅から美雨の姿を眺めていた。美雨は穏やかに微笑んでいた。
（神様、あなたはまた大切なものを奪っていくの？）

碧はその場に座り込むと、呆然とライトを見つめた。
『神様なんていないんだ』
以前口にした美雨の言葉が脳裏をめぐった。
華蓮の元気な鳴き声が、その場に響いていた。
碧は不意に管や美雨が話した父親の話を思い出した。
（僕は大切に育てるよ）
碧は美雨を見る時のような優しい目で華蓮を見つめていた。

華蓮が生まれて三度目の秋が来た。
美雨の病気は遺伝せず、華蓮は元気に育っていた。
「華蓮、川原を散歩しようか」
「うん」
華蓮は無邪気に笑った。碧は華蓮の頭をそっと撫でた。
夢に見た風景と出会うため、碧たちは川原に向かった。
「トーボだよ」
華蓮は赤トンボを追いかけた。
「華蓮、転ぶなよ」
碧は声を上げた。そして、ゆっくりと車椅子を押した。
「平気？」
「うん」
髪を耳にかけると、美雨はゆっくりと顔をあげた。
砂利道の振動を気にする碧に対して、美雨は満面笑みで応えた。
「ねぇ」
今にも消えそうな美雨の声に碧は車椅子を止めた。
「なに？」
「歌を聴かせて。三年前に約束した歌を……」
美雨は碧の顔を覗き込んだ。
碧は困った顔で頭を掻いた。
「やっぱり、恥ずかしいよ」
「だめ」

いつものようにフフフと笑う美雨の顔を見て、碧もはにかみ、笑った。
碧は車椅子を川原に向けると、横に座った。
「君はいつか、神様なんていないと言ったね。きっと必要ないんだ。人は人を幸せにできるから。大切なものを与えられるから」
碧は夕陽にきらめく川を真っ直ぐ見た。そして、華蓮を見た。
穏やかな夕日に頬を染め、碧は深く息を吸った。

ため息をするたびに
幸せが逃げるから

君がため息をするたびに
僕は口づけを繰り返すんだ

僕は君の幸せを
君は僕の幸せを

互いが互いを感じられるように
互いが幸せになれますように

こんな僕に
君は幼いと笑うかな

無邪気に笑う君に
僕はまた恋をするかな

僕は君を笑顔に
君は僕を笑顔に

幸せが連鎖していきますように
僕と君が繋がりますように

君を不安にする
夜が来るね

さあ、手を繋ごう

姿見えなくなっても
二人離れることはない

絆が二人を繋ぎ続けるから

歌い終わると、美雨は手を伸ばした。
「ありがとう」
碧は美雨の手をしっかりと握った。
碧は赤らんだ顔ではにかみ、笑った。
「離さないよ」
「うん」
美雨は小さくうなずくと、静かに目を閉じた。
哀愁を帯びた川のせせらぎ、虫の音が静かに響いた。
「お互いに作る約束だったのに、ずるいよ」
碧は瞳を潤ませた。
沈み行く夕陽が、辺りをより濃いオレンジ色に染めた。
「あっ、パパとママが手を繋いでる」
華蓮は声を上げると、懸命に駆けてきた。
「華蓮もすぅ」
近づいてきた華蓮は美雨の膝を掴んだ。
美雨は優しく微笑んだまま、目を閉じていた。

「ママ、寝ちゃったの？」
華蓮は碧の顔をうかがった。
碧は華蓮を空いている手で抱き寄せた。
「うん、寝ちゃった」
碧の声は震えていた。
「パパ、泣いているの？」
碧の声を聞いて、華蓮も声を震わせた。
碧は唇をかみ締めると、鼻をすすった。
陽が沈み、暗闇が迫ってきた。
碧は美雨の体を抱き寄せた。
「ずっと傍にいるよ」
碧は次第に消えゆく美雨の温もりを心に刻んだ。

十五年の歳月が経った。
美雨の命日、あいにくの空模様の中、碧と華蓮は墓石の前で祈りを捧げていた。
雨粒は二人の傘を跳ね、優しくも哀しい音色を奏でた。
「フフン、フン、フン」
華蓮は雨音に合わせて口ずさんだ。
碧はクスリと一つ微笑むと、華蓮の頭を撫でた。
「華蓮は歌手になるの？」
「どうかな？　夢はあるけどね」
華蓮は穏やかな顔をして墓石を見つめた。
墓参りを終えると、華蓮は桶と柄杓を持った。
「これ、返してくるね」
リズムを踏んで歩いていく後姿に、碧は美雨の姿を重ねた。
「美雨、華蓮も早いもので高校三年生になったよ。君によく似て、綺麗な声で歌うんだ」
碧が目を閉じると、目蓋の裏には色んな歌を歌う、色んな表情をした美雨の姿が映った。

帰り道、碧と華蓮は美雨が亡くなった川辺へ向かった。
「ママ、よく歌を歌っていたよね」
「覚えているの？」
「うん、所々ね。ちゃんと覚えているのは一曲だけかな」
二人は美雨が亡くなった場所にしゃがみ、花を添えた。
華蓮は川を眺め、穏やかに笑った。
「君が好きって何度も繰り返して、あれはパパに捧げた歌ね」
華蓮の言葉に碧は美雨が歌った歌を思い返した。しかし、華蓮が言うような歌は思い浮かばなかった。
『じゃあ、お互いに捧げる歌を作りましょう』
美雨の言葉が頭を過ぎった。
「華蓮、歌ってくれないか」
声を震わす碧の言葉に、華蓮は笑顔で応えた。
華蓮は碧に傘を手渡すと、ギターを取り出した。

君が好き

シャボン玉を手に乗せるような
柔らかな仕草で

耳元に唱える愛の言葉

怯えるように
硬く閉ざした　私の心は

たちまち貴方のものになった

君が好き

言葉は想いを伝えるために
伝わらなければ無いのと同じと
届けてくれた貴方の言葉
消え逝くように
鼓動を刻む　私の命で
私も貴方に届けたい
君が好き
貴方が瞳に映るから
どんな景色も輝いた
貴方の声が届くから
どんな音色も素敵な旋律になったの
君が好き
心からあなたに伝えたい
確かな絆を届けたい
心はずっと離れないよ

碧が目を閉じると、涙が溢れた。
（僕たち、これからも一緒にいられるよね）
碧が心の中で問いかけた。

雲間から優しく光が射した。
（うん）
碧が空を見上げると、美雨の声が聞こえた気がした。
碧は傘をたたむと、穏やかに微笑んだ。
「パパ」
手を伸ばす華蓮の手を碧はしっかりと繋いだ。
碧は華蓮の温もりから、確かな絆を感じた。
「ありがとう」
「ん？」
「なんでもないよ」
二人はしっかりと手を繋ぎ、川辺を歩いていった。
ススキの揺れる音、川のせせらぎが心に響いた。
二人はもう一人分の温もりを確かに感じた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0295e/

---

君が好き

2011年1月15日10時15分発行